

カフカの『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』（ 1 ）

—ヨゼフィーネの歌が伝えるもの—

佐々木 博康

Kafkas *Josefine, die Sängerin oder das Volk der Mäuse* (1)

—Die Botschaft von Josefines Gesang—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育学部研究紀要 第42巻第1号

2020年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 42, No. 1, September 2020

OITA, JAPAN

カフカの『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』(1)

ーヨゼフィーネの歌が伝えるものー

佐々木 博 康*

【要 旨】 1924年に執筆されたカフカ最後の作品『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』は、ネズミの世界における芸術家と共同体の関係を描くことを通じて、芸術の社会的意味を伝える寓話である。本稿は、語り手を「信頼できない語り手」と捉え、語り手の語りの中に含まれる作者の声に注意深く耳をすましながら、この作品のメッセージを明らかにする。厳しい生を生き抜くためにネズミ族がよりどころとしているのは、「抜け目なさ」と呼ばれる実際の分別である。しかし、それは個々人を孤立させるばかりである。ヨゼフィーネの歌は、逆に個々のネズミに平安を与え、幸福な一体感をもたらす。しかし、ヨゼフィーネとネズミ族の間には認識の相違もある。ネズミ族は、自分たちが、子供の面倒を見る父親のようにヨゼフィーネを保護していると考えている。ヨゼフィーネの方は、自分の歌が、ネズミ族に厳しい生に耐える力を与えることで、彼らを守っているのだと考えている。

【キーワード】 信頼できない語り手 芸術 芸術家 不壊なるもの

はじめに

1923年9月24日、カフカは、それまで離れたことのなかったプラハを去り、ベルリンでユダヤ人女性ドーラ・ディアマンと暮らすようになる。しかし、カフカの結核ははだいに悪化する。翌1924年の2月14日、医者である叔父のジークフリート・レーヴィがベルリンを訪れ、療養所に行くよう忠告する。3月17日に、友人のマックス・ブロートがやってきて、カフカをプラハに連れ帰る。適当なサナトリウムが見つかるまでの間、実家に滞在するためである。4月5日、カフカはオーストリアの「ウィーンの森 (Wienerwald)」にあるサナトリウムに出發する。カフカ最後の作品『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』(以下、『ヨゼフィーネ』)が書かれたのは、両親の家 にいた三週間弱の間、3月18日から4月5日までの間のことである。

カフカの依頼によって、ブロートはこの物語の原稿を、当時『プラハ新聞』の文芸欄を編集していた共通の友人オットー・ピックに送った。4月20日付『プラハ新聞』朝刊の復活祭別冊「文芸と世界」に掲載される。このときの作品タイトルは、『歌姫ヨゼフィーネ』であった。原

令和2年6月1日受理

* ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座 (ドイツ文学)

稿は、カフカの委託を受けたブローットの指示で、新聞社からシュミーデ社に送られ、『最初の悩み』、『小さな女』、『断食芸人』と併せて、短編集『断食芸人——四つの物語』として出版されることになる。

5月半ば頃、短編集の初校が届き、カフカは病床で校正を行う。このときカフカは、作品のタイトルを『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』に変えた。第二校は5月27日に出版社から送られ、カフカは6月2日に校正を始める。カフカが死んだのは翌6月3日のことである。その後はブローットが校正を引き受け、短編集は8月終わりに出版された¹⁾。

物語はネズミ族の話で、人間はまったく登場しない。一人称の語り手であるネズミが、ネズミ族の歌手ヨゼフィーネについて語る形式となっている。あらすじを見てみよう。

ヨゼフィーネは、非音楽的なネズミ族の唯一の歌手である。ネズミ族は皆、彼女の歌に心を奪われる。ヨゼフィーネが特に自分の出番だと思うのは、ネズミ族が不安や恐怖を覚えているとき、心配を抱え苦労しているとき、共同体に脅威が迫り窮地に陥ったときである。そしてネズミ族もまた、そのようなときにはヨゼフィーネの歌を聴くことを強く望む。やがてヨゼフィーネは特別扱いを求めるようになる。歌のことを考慮してすべての労働から解放してほしいと要求する。しかしネズミ族はその求めを無視する。要求が認められないヨゼフィーネは、歌の中のコロラトゥーラ（装飾的旋律）を減らすと宣言し、実際にそれを実行する。しかしネズミ族は譲歩することはない。次にヨゼフィーネは、足をケガしたので長く立っていることはできないと主張して歌を短縮する。それに対してもネズミ族は特に反応することはない。ヨゼフィーネはさらに、疲れたとか、体が弱っているとか訴え、歌うことを渋るようになる。そしてある日、ヨゼフィーネは忽然とネズミ族の前から姿を消してしまう。多くの者が捜索に向向くが見つかからない。ヨゼフィーネは死ぬことになるだろう、そしてネズミ族は彼女のことを忘れていくだろうと語り手が述べて、報告は終わる。

このように、ネズミ族の歌手ヨゼフィーネがいなくなってしまうまでが語られるのであるが、話の中身自体は、語り手によるヨゼフィーネの歌と、ヨゼフィーネという存在についての考察に終始する。ヨゼフィーネの歌はそもそも歌なのか、なぜそれがネズミ族を惹きつけるのか、歌にはどのような意味があるのか、またヨゼフィーネ自身には何か特別なところがあったのか、これらが語り手の考察の中心である。

ネズミしか登場しないこの物語が寓話であることは明らかである。これまでの解釈を一瞥しておこう。カフカの友人マックス・ブローットは、ネズミ族を寄る辺ないユダヤ民族と捉え、ヨゼフィーネを虚栄心に満ちたその指導者であると見た²⁾。それに対してマーク・アンダーソンは、ネズミ族はユダヤ民族一般ではなく、西欧に同化したユダヤ人のことであり、芸術家ヨゼフィーネは作家カフカであるとした³⁾。ペーター＝アンドレ・アルトもそれを支持している⁴⁾。しかし大方の研究者は、ネズミ族をユダヤ人に限定するのではなく、もっと一般化して一つの社会と捉え、物語では芸術家と共同体の関係が描かれていると見ている⁵⁾。その場合も、ヨゼフィーネをカフカの分身であるとし、ヨゼフィーネの歌をカフカの「書くこと」と関連づける場合が多い。

これまでの研究が、ネズミ族が寓意するものや、ヨゼフィーネとカフカの関連性について盛んに論じてきた一方で、ヨゼフィーネの歌が何を伝えているのかという点については深く掘り下げてこなかった。もちろんどの研究者もヨゼフィーネの歌の意味に言及しているが、物語内で語り手が使っている言葉をほとんどそのまま繰り返すにとどまっている。

筆者は、カフカ最後の物語である『ヨゼフィーネ』には、彼が生涯探究し続けたことの結論がメッセージとして示されていると考える。本稿では、この作品を芸術家と社会の関係をモデル化して描いたものと捉え、芸術家が人々に伝えるもっとも重要なものは何であるとカフカが考えていたのかを解明する。

ただ、物語の解釈に当たっては注意しなければならないことがある。それは、語り手の問題である。『ヨゼフィーネ』では、ヨゼフィーネという芸術家が考察の対象となっているが、語り手がどのような立場にいるのかによって彼女に対する見方は異なってくる。つまり、芸術や芸術家というものをどのように見ているのかという点が問題となる。語り手はどのような位置にいらるだろうか。

ネズミ族にはヨゼフィーネの「信奉者 (Anhang)」(367)⁶⁾もいれば、「反対派 (Opposition)」(354) もいる。語り手は、「私も半分はこれ (=ヨゼフィーネの反対派) に属する」(354) と述べている。つまり、ヨゼフィーネの信奉者でないことは確かであるが、かといって完全な反対派に属するというわけでもない。どちらかといえば反対派に共感する存在として自分を位置づけている。実際、物語を読んでいくとわかるように、語り手はヨゼフィーネの歌がただのチュウチュウ鳴きとどう違うのかが理解できないし、ヨゼフィーネに対して意地の悪い見方をすることも多い。彼女がいなくなった後もさほど残念がってはいない。『ヨゼフィーネ』の語り手は、同じ芸術家物語である『断食芸人』の語り手とは異なり、芸術や芸術家に対して距離を置いた語り手、日々の労働に精出すことを一番の徳とする一般勤労者を代表する語り手である。その意味で、仕事から解放されて「書くこと」に専念することを求め続けた作者カフカとは、価値観を共有していない。ヨゼフィーネに対する見方という点ではバイアスのかかった語り手であり、いわゆる「信頼できない語り手」なのである。

語り手が「信頼できない語り手」であることが理解されていなかったことが、これまで多くの解釈者を混乱させてきた。『ヨゼフィーネ』にはヨゼフィーネ自身の直接の発話も、彼女と他のネズミたちとの対話もない。すべては語り手による推測や間接的な引用から成る⁷⁾。それゆえ読者は、語り手によって語られることをどの程度まで確かなものと受け取ってよいかわからず、曖昧で不安定な状態に置かれることになる。しかも語り手は、自分が述べたことを自ら否定するような言辞を多用する。そのため読者は何が真実なのかがつかめなくなってしまうのである。

しかし語り手のこのような語りは、作者の戦略である。物語の登場人物はヨゼフィーネと語り手とその他のネズミたちであるが、影の登場人物とも言えるのは、「信頼できない語り手」を操る「作者」である。作者は物語内に一つの人格として直接顔を出してはいない。しかし、「信頼できない語り手」を設定して、自身とは違う立場からヨゼフィーネを見させる一方で、自身の考えも語り手を通じて密かに読者に伝えようとしている。「信頼できない語り手」の語りを操作し、その中に自身の考えを巧みに織り交ぜている。そのため、物語を読んでいく際には、「信頼できない語り手」の考えと、その語りの中に含まれる作者の声をしっかりと区別する必要がある。

以下、語り手がヨゼフィーネとその歌について、また彼女とネズミ族の関係について、どのように語っているのかを批判的に検討しつつ、この物語が寓話として何を伝えようとしているのかを明らかにする。

1. ヨゼフィーネの歌がもたらすもの

まず、ヨゼフィーネの歌がネズミ族にどのような効果をもたらすのかを見ていく。

語り手は、非音楽的な自分たちがヨゼフィーネの歌を理解していると感じるのはなぜかと問いい、それは歌があまりにも美しいからだろうかと考える。しかし、すぐに自分でそれを否定する。

この答えは満足のいくものではない。本当にそうなら、この歌を前にして、何よりもまず、そして絶えず、尋常ならざるものに触れているような感覚（das Gefühl des Außerordentlichen）を抱くに違いない。この喉からは何かあるものが、我々がこれまで一度も聞いたことがなく、また我々にはそれを聞く能力がまったくないそういうもの、それを聞く能力を我々に与えるのはただこのヨゼフィーネ一匹だけであって、他の誰にもできないのだと思わせるもの、そういうものが響いているのだという感覚を。しかし、私の考えでは、このことこそ当てはまらないことなのである。（351）

語り手は、「尋常ならざるものに触れているような感覚」という言葉を語る。次いでそれを、「この喉からは何かあるものが、我々がこれまで一度も聞いたことがなく、また我々にはそれを聞く能力がまったくないそういうもの、それを聞く能力を我々に与えるのはただこのヨゼフィーネ一匹だけであって、他の誰にもできないのだと思わせるもの、そういうものが響いているのだという感覚」と長々と言い換える。この長々とした言い換えの後に、語り手はこのことを否定するのであるが、否定にもかかわらず、読者の脳裏にはこの表現が強く印象づけられることになる。これは外山滋比古の言う「修辭的残像」⁸⁾である。つまり、ここには語り手の意図とは別に、そのような残像を読者の脳裏に浮かび上がらせようとする作者の意図が働いている。また、まわりくどいとも思われる長々とした言い換えはいわゆる「異化表現」であり、それによって読者はこの表現に注目するようになる。作者は語り手の背後から読者に向かって、語り手の語ることは別の考えをさりげなく読者に示唆している。このような修辭的残像や異化表現という手法を通じて、読者は、語り手の否定にもかかわらず、ヨゼフィーネの音楽を聴く者は、実は「尋常ならざるものに触れているような感覚」を抱いているのではないかと思うようになる。

語り手はヨゼフィーネの歌についてあれこれ考えをめぐらす。「それはそもそも歌なのだろうか。それはひょっとしたら単なるチュウチュウ鳴きにすぎないのではないか」（351）という疑念を抱くが、すぐに、「彼女が生み出すのは単なるチュウチュウ鳴きではない」（352）と自らその疑念を打ち消す。しかし、ヨゼフィーネの歌の芸術性は、クルミ割りの譬えによって再度否定される。

クルミを割ることは芸術（Kunst）でも何でもなし。それゆえ、あえて観客を呼び集め、その前で彼らを楽しませるためにクルミを割ることは誰もしないだろう。誰かがそれでもそれをし、その意図が達成されたとしたら、それは単なるクルミ割りではないのだ。あるいはそれはクルミ割りなのだが、我々がそれを難なくやっつけてのけることができるのでこの技（Kunst）を見逃しているということ、そしてこの新しくクルミを割って見せる者が初

めて、この技のもともとの本質 (ihr eigentliches Wesen) を我々に示しているのだということが明らかになる。その際、その者が我々の大多数よりもクルミを割るのがいくらか下手であるなら、その方が効果はいっそう大きいかもしれない。(353)

語り手はこのような譬えを持ち出し、「ひょっとしたらヨゼフィーネの歌も同じようなものなのかもしれない、我々は自分たちの場合にはまったく賛嘆しないことを、彼女の場合は賛嘆している」(353) と考える。語り手がここで主張しているのは、ヨゼフィーネのチュウチュウ鳴きは普通のネズミのチュウチュウ鳴きと同じものなのだが、ヨゼフィーネがそれをあえて「芸術」として呈示するのでそれが芸術とされているにすぎないということである。

上の引用で述べられているのは、シクロフスキーのいわゆる芸術の異化作用とほとんど同じ考えである⁹⁾。ただ、シクロフスキーが異化作用に芸術の意義を見るのに対して、この物語の語り手はヨゼフィーネの歌の芸術性を否定するためにクルミ割りの譬えを持ち出している。しかし、ここでも、語り手が否定的に語っていることは、実は作者が肯定的な意味で主張したいことなのではないかという疑いを読者は抱く。特に、「この新しくクルミを割って見せる者が初めて、この技のもともとの本質を我々に示しているのだ」という一文に含まれる「もともとの本質」という表現がその感を強くする。否定的なことを主張しようとしているコンテキストでこの哲学的とも言える表現は異質であり、読者はそこにどうしても肯定的なニュアンスを感じとってしまう。

「もともとの本質」という表現は、クルミ割りの譬えを持ち出す前に語られた「生の表出 (Lebensäußerung)」という言葉と関連している。語り手は、ヨゼフィーネの歌は「単なるチュウチュウ鳴きにすぎないのではないか」(351) と疑い、「チュウチュウ鳴きなら我々はみんな知っている。それは我が民族本来の芸術能力だ。あるいはむしろ、能力などではまったくなく、特徴的な生の表出の一つであるかもしれない」(351f.) と述べている。「生の表出」という言葉もまた、抽象的で硬い表現である。そのため読者の注意を引く。カフカはクルミ割りの譬えにある「もともとの本質」という言葉と対照させるためにあえてこのような言葉を使ったと思われる。普通のネズミのチュウチュウ鳴きは単なる「生の表出」にすぎないが、ヨゼフィーネの歌はそれとは明らかに異なり、普段何気なくやっている行為の「もともとの本質」、本来の意味を開示するものなのである。

ではチュウチュウ鳴きの「もともとの本質」とは何か。このことを念頭に置きながら、さらにヨゼフィーネの歌がどのようなものとされているのかを検討していこう。

語り手はヨゼフィーネの歌をただのチュウチュウ鳴きであると思おうとしつつも、そこには自分たちを強く惹きつけるものがあることを何度も強調する。

チュウチュウ鳴きは我々が考えることもなく習慣的にしていることなので、ヨゼフィーネの聴衆たちもまたチュウチュウ鳴きをすると思うかもしれない。(……) しかし、彼女の聴衆はチュウチュウしない。静まり返っている。我々自身のチュウチュウ鳴きでは到達できない憧れの平安 (des ersehnten Friedens) に与っているかのように、我々は沈黙している。我々を魅了するのは彼女の歌なのだろうか。あるいはむしろ、弱々しい声を取り囲んでいるおごそかな静寂なのではないのか。(354)

語り手はここで、ヨゼフィーネの歌がネズミ族を惹きつける理由を自らに問い、結局、ヨゼフィーネの歌というよりは、彼女を取り囲んでいる自分たち聴衆の「おごそかな静寂」の方なのではないかという答えを思いついている。信頼できない一人称の語り手は、常にヨゼフィーネの歌を過小評価する。だが、語り手の背後で作者が、ヨゼフィーネの歌がもたらすものを読者に伝えてくれている。つまり、「憧れの平安」¹⁰⁾である。それは、「我々自身のチュウチュウ鳴きでは到達できない」ものとされていることから明らかなように、単なる「生の表出」ではなく、ネズミ族の存在の本質と関わるものなのである。

このように、ヨゼフィーネの歌は「平安」をもたらすものなのであるが、さらにどのような特質を持っているとされているのかを見ていこう。

ヨゼフィーネの歌を否定的に見る語り手は、それが子供のチュウチュウ鳴きと変わらないことを強調する。

あるとき、愚かな小さい奴が、ヨゼフィーネの歌の最中、まったく無邪気にも自分でもチュウチュウ鳴きを始めるということがあった。なんとそれは、我々がヨゼフィーネから聞いているものとまったく同じものだった。前方の舞台では、いつもいつもやっているにもかかわらず依然としておずおずとしたチュウチュウ鳴き、そしてここ観客の間から、我を忘れた子供らしいチュウチュウ。違いを聞き分けることは不可能だったろう。(354f.)

このように言いつつも、語り手は結局は、ヨゼフィーネの歌の前ではこの「邪魔した娘(Störerin)」(355)は「きっと不安と恥ずかしさで身を隠しただろう」(355)と述べて、自分の語ったことをすぐに打ち消してしまう。ここで作者が語り手を通じて伝えようとしているのは、この小ネズミの「我を忘れた子供らしいチュウチュウ」にはヨゼフィーネの歌と一脈相通じるものがあるということである。

以上見てきたように、ヨゼフィーネの歌は「尋常ならざるもの」であり、チュウチュウ鳴きの「本質」を表現するものである。それは聴衆に「平安」を与える。そして、「子供らしい」性格のものである。では、この歌はネズミ族という共同体にとってどのような意味を持つのか。いわば芸術の社会的機能は何かという問題である。

我々の生活は非常に不安定だ。日々、驚愕、不安、希望、恐怖がもたらされる。もし、日夜あらゆるときに、同志の支えが得られなければ、ひとりだけではこういったことすべてに耐えることはできないだろう。しかし同志の支えが得られるときでも、本当に辛いときがしばしばある。ときには千もの肩が、もともとただ一匹に課せられた重荷の下で震えることもある。そのときヨゼフィーネは自分の出番だと思う。(355f.)

語り手によれば、ネズミ族は、希望もあるが、不安にかられ、恐怖に襲われることも多い「不安定」な生活の中で、「同志の支え」を頼りに生きている。しかし、「本当に辛いとき」がある。すなわち、一匹のネズミにあまりにも重い苦しみがかせられ、千ものネズミがそれを分け持ったとしても、それでもなお一匹一匹の肩がふるえるほどの苦しみに耐えねばならないときがある。「そのときヨゼフィーネは自分の出番だと思う。」つまり、ヨゼフィーネ自身は、自分の歌はネズミ族の苦しみを慰め、緩和するという機能を持っていると考えているのである。

彼女は、このかよいい存在は、用意万端、特に胸の下を不安そうにぶるぶるふるわせながら立っている。自分が持っているすべての力を歌に集中させたかのように、彼女の中の歌に役立たないすべてのものから、あらゆる力が、ほとんどあらゆる生の可能性が抜き取られたかのように、すべてをさらけ出し、何もかも放棄し、よき精霊たちだけに身をまかせて守られているかのように、そんなふうに完全な抜け殻となって歌に没頭している間は一吹き of 冷氣がかすめ過ぎただけで彼女を殺してしまうことができるかのように。(356)

ヨゼフィーネは、それが彼女の使命であるかのように全身全霊を傾けて歌を歌う。ここでは語り手は作者の代弁者となり、ヨゼフィーネの姿を肯定的に描き出している。ただすぐに、「国中の誰もができるチュウチュウ鳴きをいくらかしぼり出すためでさえ、彼女はそんなに恐ろしいほどの努力をしなければならないのだ」(356)と批判的につぶやくのであるが、その後再度自分の言葉を打ち消すように、そういう印象は「一時的なものだ」(356)とする。そして、「すぐに我々もみんなの感情に浸り込み、体と体をくっつけて温め合いながら (warm, Leib an Leib), おずおずと息をしつつ耳を傾けるのである」(356)と締めくくる。

「体と体をくっつけて温め合いながら」という表現は、『ある犬の探究』に登場する探究犬の言葉、「私たち(＝犬族)に許されたこの最高の幸福、つまり、一緒になって温め合うこと (das warme Beisammensein)」¹¹⁾を思い出させる。それはカフカにとって、理想的共同体を指し示す表現である。ヨゼフィーネの歌は、平和な安らぎに満ちた共同性をもたらすもの、一人一人のやさしいつながりをもたらすものなのである。これがヨゼフィーネの歌の社会的意味である。

2. ヨゼフィーネが歌によって戦っているもの

このように、ヨゼフィーネは歌を通じて共同体の成員同士の融和をもたらすが、一方で戦いも行っている。彼女は何に対して戦っているのだろうか。

語り手は、なぜネズミ族がヨゼフィーネのために尽力するのかと問う。ヨゼフィーネに無条件に帰依しているからだろうか考えるが、すぐにそれを否定する。

無条件の帰依というものを、我が民族はほとんど知らない。この民族、何にもまして抜け目なさ (Schlauheit) を、もちろん害のないものであり、つまりは子供らしいささやきを、唇を動かすだけの、もちろん罪のないおしゃべりを愛しているそんな民族は、いずれにせよ無条件に帰依することなどできない。おそらくヨゼフィーネもそれを感じている。彼女が弱々しい喉を全力でふりしぼって戦っているのはまさにそれなのである。(358)

語り手は、ヨゼフィーネは自分に対する無条件の帰依を求めて戦っていると結論づける。だが、はたしてそうなのか。

ここではからず語り手がもらしているネズミ族の特徴に注意を向けてみよう。語り手は自分の属する民族のことを、「何にもまして抜け目なさを(……)愛しているそんな民族」と述べる。「抜け目なさ」はここでは、「害のないもの」、「子供らしいささやき」、「唇を動かすだけの、もちろん罪のないおしゃべり」と言い換えられている。つまり語り手は、「抜け目なさ」を肯定

的なものと見ており、読者にもまた同じように受け取ってもらおうとしている。あるいは、「もちろん害のないものであり」、「もちろん罪のないおしゃべり」と、「もちろん」が短い間に二度も繰り返されていることを考えれば、「抜け目なさ」が当然肯定的なものであるとは必ずしも思っていないが、肯定的なものと思おうとしており、読者にもまたそう受け取ってもらって、自分自身の考えをより強固なものにしてもらおうとしていると言ったほうが正確かもしれない。信頼できない語り手の特徴がよく表れていると言えよう。

「抜け目なさ」についてはすでに物語の初めでも語られていた。

ある種の実際的な抜け目なさ (eine gewisse praktische Schlauheit), もちろん我々にはそれが非常にさし迫って必要なのだが、それを我々は自分たちの最大の長所と見なしている。この抜け目なさの微笑みを浮かべながら、我々は我が身を慰めて、すべてを忘れるのを常としている。たとえ、いつの日か——しかし、そういうことは起こらないだろうが——ひょっとしたら音楽から発散されるのかもしれない幸福への欲求を抱くことがあるとしても、そうするだろう。(350)

語り手は、「抜け目なさ」を「自分たちの最大の長所」として肯定的なものであることを強調する。それに対して、「音楽」や「幸福への欲求」については、「たとえ～としても」や「ひょっとしたら～としても」という仮定のもとに言及する。そればかりか、「そういうことは起こらないだろうが」とわざわざ断り書きまで入れている。

語り手の微妙な言い回しに惑わされず、客観的に見るなら、ここには二つの立場があることがわかる。一つは「抜け目なさ」を生きる上で不可欠の要素とする立場であり、他の一つは音楽がもたらす「幸福への欲求」を何よりも重視する立場である。前者が語り手や他のネズミたちの立場であり、後者がヨゼフィーネの立場である。

語り手は、「抜け目なさ」を生きる原理とすることは、実際的な必要性という点からして当然のことであると考えている。しかし、見方を変えれば、「抜け目なさ」とは他者を出し抜くために必要となるものである。そのために我々は表情を作り、言辞を弄する。互いを信じられず、個々人は孤立し、孤独の中に自閉する。一方、ヨゼフィーネの音楽は、一人一人を結びつける。それは担えない苦しみを緩和し、「平安」を授け、互いに「温めあう」幸福な共同性をもたらす。

語り手は、ヨゼフィーネが自分に対する無条件の帰依を求めて戦っていると述べている。しかし、この信頼できない語り手の発言の奥に読者が聞き取るべきは、ヨゼフィーネが実際に戦っているのは「抜け目なさ」を生る原理とする立場に対してである、という作者の声である。

3. ヨゼフィーネとネズミ族の関係

では、ネズミ族はヨゼフィーネという存在自体についてはどう考えているのだろうか。これは、一般化して言うなら、民衆が芸術家をどう捉えるのかという問題である。

語り手は、民族のヨゼフィーネに対する関係について次のように述べる。

時折私は、民族がヨゼフィーネに対する自分たちの関係を次のように考えているという印象を受ける。つまり、彼女が、この壊れやすく、守ってやる必要があり、何らか点で際立つ

ているこの存在が、自分たちの手に委ねられており、自分たちは彼女に気をつけてやらねばならないのだと。その理由は誰にも明らかではない。事実だけが確固としているように思われる。(358)

語り手はまた、「民族は、手を自分の方へと伸ばす——お願いなのか要求なのかははっきりとはわからないが——子供の面倒を見る父親のように、ヨゼフィーネに気をつけている」(359)とも述べている。民族とヨゼフィーネの関係は保護者と子供の関係である。

ではヨゼフィーネのほうはどう思っているのだろうか。

語り手は、ヨゼフィーネに向かって自分たちが父親のように保護しているなどと言ったりすれば、「あんたたちの保護なんて余計なお世話よ」(359)という答えが返ってくるだろうと言う。そしてヨゼフィーネの心中を次のように推測する。

民族を守っているのは自分であると彼女は思っている。政治経済のひどい状態からあなたたちを救っているのは、私の歌であり、私の歌はまさにそれを成し遂げているのだ、それは不幸を追い払うことはないかもしれないが、少なくともそれに耐える力を与えている、と。(359f.)

語り手はしかし、そうは思わない。「もちろん、彼女が我々を救うことはないし、我々にどんな力も与えてはくれない。民族の救済者を気取ることは簡単だ」(360)と冷たく突き放す。しかし、例によって、そう言った口の端からすぐに、それをまったく否定するような言辞を付け加える。

だがしかし、我々がまさに窮地に陥ったときに、いつも以上にしっかりとヨゼフィーネの声に耳を傾けるのは本当である。我々に迫っている脅威は我々をふだんより静かにし、控え目にし、ヨゼフィーネの命令に対して従順にする。喜んで我々は集まる。喜んで我々は押し合いへし合いする。(……)それはまるで、我々が急いで(……)戦いの前の平安の盃(ein Becher des Friedens)と一緒に飲んでいるかのようだ。それは歌の公演ではなく、むしろ民族集会、しかも、舞台上の低いチュウチュウ鳴き(＝ヨゼフィーネの歌)を除いてまったく静まり返っている集会である。お喋りで過ごすには、あまりにも真剣なひとときなのである。(361)

語り手を含めたネズミ族の聴衆が喜々としてヨゼフィーネの歌を聴くために集まり、そしていざ歌が始まるとそこに現出するのは「あまりにも真剣なひととき」であると言われる。語り手はそれこそ喜々としてヨゼフィーネの歌の力をほめそやす。語り手によるヨゼフィーネの歌の全面的な肯定に接する読者は、語り手が直前に否定した、「民族を守っているのは自分である」というヨゼフィーネの考えが実は部分的には妥当するのではないかという思いに引き戻されることになる。

ヨゼフィーネが実際に、「民族を守っているのは自分である」と述べているわけではない。ヨゼフィーネは何も言っていない。「彼女はそもそもほとんど喋らない」(360)のである。すべては語り手の推測に過ぎないのである。語り手のこの推測、そしてまた他の個所でも見られるヨ

ゼフィーネに対する否定的な見解は、まさにこの語り手が「抜け目なさ」を原理として生きていることを示している。他者の意図の中にまず悪意を読み取って用心することが習わしとなっている。それがコミュニケーションを阻害しているにもかかわらずである。それは人間一般の日々の生き方でもある。

注

- 1) 作品成立から出版までの経緯については、Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten. Apparatband*, hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, Frankfurt a. M. 1996, S. 386-493 参照。
- 2) Brod, Max: *Über Franz Kafka*, Frankfurt a. M. 1980, S. 168f. しかし、プロートはネズミ族は人類一般のことでもあると述べている。
- 3) Anderson, Mark M.: *Kafka's clothes. Ornament and Aestheticism in the Habsburg Fin de Siècle*, Oxford 1992, S. 205f. u. S. 216.
- 4) Alt, Peter-André: *Franz Kafka, Der ewige Sohn, eine Biographie*, München 2005, S. 666.
- 5) Wiese, Benno von: Der Künstler und die moderne Gesellschaft. In: *Akzente* 5, 1958, S. 112-123; Emrich, Wilhelm: *Franz Kafka*, 9. Aufl., Königstein i. Ts. 1981, S. 167-172; Polizer, Heinz: *Franz Kafka. Der Künstler*, Frankfurt a. M. 1978 [1962], S. 473-489; Richter, Helmut: Franz Kafka. Werk und Entwurf, Berlin 1962, S. 246-251; Hermsdorf, Klaus: Künstler und Kunst bei Kafka. In: *Weimarer Beiträge* 10(1), 1964, S. 404-412; Hillmann, Heinz: Franz Kafka. Dichtungstheorie und Dichtungsgestalt, Bonn 1973, S. 93-107; Robertson, Ritchie: Der Künstler und das Volk. Kafkas »Ein Hungerkünstler. Vier Geschichten«. In: Text + Kritik. Sonderband VII/94, hrsg. v. Heinz Ludwig Arnold, München 1994, S. 180-191; Saße, Günter: *Josefine, die Sängerin oder Das Volk der Mäuse*. In: *Interpretationen. Franz Kafka. Romane und Erzählungen*, hrsg. v. Michael Müller, Stuttgart 2009 [1994], S. 386-397.
- 6) 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』からの引用は、Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*, Kritische Ausgabe, hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, Frankfurt a. M. 1994 による。本書からの引用は本文中に頁数のみを挙げて示す。なお、訳は拙訳である。
- 7) 『断食芸人』には末尾に断食芸人と監督との直接話法による対話がある。また、断食芸人の死後の監督の発言も示される。『ある犬の探究』の末尾にも、語り手の探究犬と狩人犬の長い対話がある。これらの直接話法による対話は、語り手の語りとは異なり、物語における客観性を保証するものである。ところが『ヨゼフィーネ』では最後の最後まで語り手の語りで貫かれている。
- 8) 外山は「修辞的残像」の説明の中で、次のように述べている。「コンテキスト中におかれた語のもつ語義は、優性なものを表面、頂点とし、劣性なものを底部にもつ漸層的構造にあることは前述した。そういう語義をもつ単語が相互に関連をもつように配列されると、照応し合い、そのために深層劣性の語義が活性化する。そして、第一次的の主要コンテキストのほかに、深層語義の照応による副次的コンテキストが形成される。」(外山滋比古『修辞的残像』みすず書房, 1986 [1968], 13 頁)
- 9) ザーセもクルミ割りの譬えを異化作用と結びつけている。(Saße, a. a. O., S. 389f.) アルトも同様であるが、さらに興味深い指摘を付け加えている。つまり、異化作用について述べたシクロフスキーの論文「方法としての芸術」(1917) が出るずっと以前に、プロートが「美学のために」(1906) において似た考えを示しているというのである。(Alt, a. a. O., S. 663)
- 10) 「憧れの平安 (der ersehnte Frieden)」という表現は、『変身』における「憧れの未知の糧 (die ersehnte unbekannte Nahrung)」(Kafka, *Drucke zu Lebzeiten*, a. a. O., S. 185) を思い出させる。『変身』の主人公グレゴールは、妹グレーテのバイオリン演奏を聴いたとき、そこに「憧れの

未知の糧への道」が示されているかのように感じる。音楽という点でヨゼフィーネの歌と共通している。

- 11) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, Kritische Ausgabe, hrsg. v. Jost Schillemeit, Frankfurt a. M. 1992, S. 425.

Kafkas *Josefine, die Sängerin oder das Volk der Mäuse* (1)

—Die Botschaft von Josefines Gesang—

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

Das letzte Werk Kafkas, *Josefine, die Sängerin oder das Volk der Mäuse* (1924), spielt in der Welt der Mäuse, ist also eine Allegorie. Allegorisiert wird die Beziehung zwischen Künstler und Gemeinschaft; zur Diskussion steht die soziale Bedeutung von Kunst. Um im Lebenskampf bestehen und überleben zu können, sind die Mäuse auf einen praktischen Verstand angewiesen: "Schlauheit". Mit dieser Schlauheit geht aber ein Nachteil einher: sie isoliert und vereinzelt. Josefines Gesang gibt den einzelnen Mäusen hingegen ein Solidaritäts- und Zusammengehörigkeitsgefühl. Allerdings besteht zwischen Josefine und den Mäusen ein Erkenntnisunterschied. Josefine glaubt, den Mäusen Kraft zu verleihen, um die Härte ihres Lebens zu ertragen, während die Mäuse, unfähig, den Wert ihrer Kunst zu verstehen, vom Gegenteil ausgehen: dass sie es wären, die die zarte Sängerin beschützen.

【Key words】 unreliable narrator, Kunst, Künstler, das Unzerstörbare